

禍を糧に そしてその先の未来へ

岐阜市立岐阜中央中学校 3年

中西 真尋

「もう公園で遊べなくなるの？会えなくなっちゃうの？」

この春、私たちは様々なものを奪われた。

コロナウイルスという見えない敵に。

2月27日夜、テレビから流れる安倍総理の会見で、あと1日学校に行ったら新学期まで休校になることを知った。長い休みは嬉しいはずなのに、あまりに突然すぎて言葉を失った。そんな私の隣では、小6だった弟が、

「明日で卒業だなんて絶対いやや。」

と泣いていた。

休校になってしばらくは、本を読んだり、従妹達と工作をしたりして、のんびり過ごしていた。マスクで過ごす生活にも慣れた頃、岐阜市でもクラスターが発生し、コロナウイルスの感染者数もみるみるうちに増えていった。休校も延長、塾や習い事に行けないだけでなく、買い物にさえついて行けず、母がメモを片手に必要なものだけ買ってくるようになった。それまで毎日のように遊んでいた公園にも使用禁止の張り紙が貼られ、休校中に仲良くなった幼い友達とも会えなくなってしまった。「もう会えなくなっちゃうの？」と私を見上げるその女の子は「コロナじゃないのに遊べないの？ママは病院で働いているけどコロナじゃないもん。」と早口で続けた。

私は一瞬その言葉の意味を理解できず、考えれば考えるほど驚き、胸が痛くなった。

三密、クラスター、ソーシャルディスタンスなど、コロナウイルスは様々な新しい言葉を生んだが、差別や偏見といった悲しい現実も少なからず生まれてしまっているのだ。

気持ちが晴れない私に追い打ちをかけるように、今年こそは更なる上をと目指していた中体連の中止が決まった。

「あー、もうイヤ。毎朝走っていたのに。全部、コロナのせいじゃんっ。」

イライラしてソファーに寝転ぶ私の横で、テレワーク中の母がTV会議を始めた。3カ月前には想像できなかった光景が、今では当たり前になっている。母は「通勤がないのは感染予防だけでなく、家族や自分の為に使える時間が増えて本当に有難いわ。」と喜んでいる。確かにこのコロナ禍によりテレワークは母のワークライフバランスの実現に繋がり、私達家族の生活を豊かにした。

科学者ニュートンはペストの流行による大学の休校中に万有引力の法則を発見した。私達もコロナ禍によって行動を制限されている、機会を奪われていると嘆くのではなく、ニュートンのようにこの禍を糧に、せっかくのゆとりある時間の中から新しい未来を創造すべきだと思う。この先、コロナウイルスに限らず、私達の生命をおびやかす新たな感染症の拡大が起こったとしても、すぐに敵だと距離を置くのではなく、共に生きていける社会を創り上げなければならない。そして未知の感染症への不安は偏見や差別を生んでしまうかもしれない。しかし私達は風評やデマに惑わされることなく、どんなに便利な世の中になっても、直接会い、相手の目を見て言葉を交わし、人と人との間に温かい空気を育むことを大切にしたい。

命を守る為だとステイホームをしていた私の将来の夢は医師だ。医療従事者は今も自分の命を懸けてこの新しいウイルスと戦っている。私には患者を救うために最前線に出ていく覚悟があるのか、この休校中、自問自答する瞬間が何度かあった。コロナ禍によって出会えた人、考えられた事、変わった事を糧に私はやはり、ふるさと岐阜の医療を担うという宿命を自分自身の手で背負いたいと思う。

次の春にはきっと、世界中がコロナウイルスと共存していることだろう。

そして私は、みんなの夢や希望を聖火に乗せ、このふるさと岐阜の街を走る。聖火の向こうに広がる、明るく輝いた未来へ向かって。